

カナダ・オンタリオ州の保育・幼児教育の現在

A study on current situation of early child education and child care in Ontario,
Canada

大宮 明子
OMIYA Akiko

要 旨

本稿は、カナダ・オンタリオ州で行われている保育・幼稚園教育の改革と実践を概観し、そこでの問題点を明らかにすることを目的とする。カナダでは各州に教育の権限・責任があり、公立の幼稚園・小・中・高の管理は地域の教育委員会が行っており、義務教育期間や幼児教育機関（幼稚園）の就園年数も州により異なっている。オンタリオ州の幼稚園教育は、4歳児から開始され2年間提供されており、園は通常小学校に併設されている。オンタリオ州では6歳から義務教育が開始されるため、幼稚園に入園するかどうかは強制ではないが、多くの家庭の子どもが入園している。一方保育は、民間が主として提供しており、州内のチャイルドケアセンター、保育所（ナーサリー）、および在宅保育などで行われている。

オンタリオ州の保育・幼児教育の改革として、本稿では、「今日のすべての乳幼児のための学習（ELECT）」（2007）・「学習はどのように起こるのか（HDLH）」（2014）・「幼稚園教育要領」（2016）の3つの指針を挙げ、それらがどのように現場で使われているか、どのような問題があるかを考察した。また、カナダ・ブリティッシュコロンビア州での先例を基に開始された、オンタリオ州内のプロフェッショナルディベロップメントを説明し、この取り組みの現状と今後の課題について述べた。

I. はじめに

日本では2017年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂され2018年から施行された。世界では様々な保育・幼児教育の改革が行われているため、各国の取り組みの中に、今後の日本の子どもたちの豊かな学びや発達を導く手がかりがあるかもしれない。一例として、カナダ・オンタリオ州では2010年以降、幼児教育制度の大改革が行われている。そこで本稿は、カ

ナダ・オンタリオ州で行われている保育・幼稚園教育の改革と実践を概観し、そこでの問題点を明らかにすることを目的とする。

まず、カナダの保育・幼児教育の概要を述べる。カナダでは1969年の公用語法により、英語とフランス語が公用語とされており、10州と3つの準州から成るカナダの中で、首都オワタがあるオンタリオ州は英語が公用語である。カナダでは各州に教育の権限・責任があり、公立の幼稚園・小・中・高の管理は地域の教育委員会が行っており、義務教育期間や幼児教育機関（幼稚園）の就園年数も州により異なっている。

オンタリオ州の幼稚園教育は、4歳児から開始され、JK（年中クラス/4歳児クラス）とSK（年長クラス/5歳児クラス）¹⁾の2年間提供されており、園は通常小学校に併設されている。オンタリオ州では6歳から義務教育が開始されるため、幼稚園に入園するかどうかは強制ではないが、多くの家庭の子どもが入園している。園の種類として、公立幼稚園（英語を使用）・公立フレンチイマージョン幼稚園（フランス語）²⁾・公立カトリック幼稚園（英語）・公立カトリック・フレンチイマージョン幼稚園（フランス語）・私立幼稚園（英語）があり、家庭がどの種類の幼稚園に入園するかを決める。毎年9月が新学期であり、9月1日から12月31日までに4歳になる子どもが9月にJKに入園、5歳になる子どもがSKに入園する。

オンタリオ州の就学前の保育は、民間が中心となって、市内のチャイルドケアセンター、保育所（ナーサリー）、および在宅保育などで行われている。認可された施設は、オンタリオ州政府が定めたChild Care and Early Years Act（2014）（以下CCEYAと略）に定められた規制に従って運営されなければならない、少なくとも年に1回、州教育省によって運営がチェックされることになっている。認可在宅保育提供者は、教育省から認可されているのではなく、教育省から認可された在宅保育機関と契約し、乳児から13歳未満の子ども最大6人（4歳未満の自分の子どもが含まれている必要がある）を在宅でケアする。各種保育施設を利用している子どもたちの多くは、就園年齢になると、保育施設をやめて幼稚園へ入園する。カナダの子どもは10歳から一人で留守番をすることが可能となり、12歳からは下の子どもの面倒を見ることができる。つまり、9歳以下の子どもを家に一人に残しておくことはできないので、幼稚園入園後は、親の仕事等によっては民間の放課後プログラム（日本の学童保育に類似）を利用する場合もある。

オンタリオ州では、日本の幼稚園教諭免許と保育士資格ではなく、小学校免許を有している教員（JKから小学校を担当）とEarly Childhood Educator（以下ECEと略、0歳から担当）が保育・幼児教育を担当する。教員は、学士号取得後教職課程を修了したのち州の資格試験に合格し、資格管理団体であるオンタリオ州教員協会に登録することが必要とされている（森本，2019）。ECEは2年間の専門カレッジを修了すると資格が取得される。州政府は2007年にEarly Childhood Educators Actを制定し、この法に基づいてECE資格登録認定の団体であるCollege of Early Childhood Educatorsが設立された。ECEはこの資格登録認定団体で登録が認められると、登録ECE（以下RECEと略）と名乗ることができる。

次に、オンタリオ州の保育、幼児教育、専門的学習、保護者の支援について整理する。

II. オンタリオ州の保育

1. 保育の特徴

認可保育所と幼稚園における子どもの年齢と保育者の人数、クラスの人数などは表1の通りである。

州内の各種保育施設は民間が経営しており、保護者は施設ごとに一定の利用料を支払う。例えば、州内で多くの保育・早朝・放課後プログラムを提供するYMCAが運営している、ある保育所の通常保育の利用料は、平日7時半から18時までで、トドラーが1か月週5日利用した場合平均1,000カナダドル（約85,000円）超³⁾とかなり高額である。施設や子どもの年齢、利用頻度によって利用料は異なるが、支払いが難しい家庭は州内の自治体に料金補助金の申請をすることができる。

2. 保育についての指針

州政府は、2007年にEarly Learning for Every Child Today（以下ELECTと略）を制定した。これはオンタリオ州内の保育・幼児教育におけるカリキュラムの指針であり、保育プログラムの質と一貫性を高めるために制定されたものである。この中では、幼児がどのように学び発達するかが述べられ、初期環境における実践と0－8歳の発達の連続性を導くための6つの原則が含まれている。この指針により、子どもの学習と発達について、保育者や保護者に共通言語と共通理解をもたらした。

その序章に示されている6つの原則は以下のとおりである。①乳幼児期の発達は、生涯学習、行動、健康の基盤となる。②家族や地域社会とのパートナーシップによって、乳幼児のニーズにあった保育・教育環境の力が高まる。③多様性、公平性、インクルージョンの尊重は、子どもの権利、最適な発達及び学習を重んじるための前提条件である。④計画的カリキュラムは、初期の学習を支援する。⑤遊びは、子供の自然な興味や活力をフルに生かす学習の手段である。⑥知識が豊富で、応答的な乳幼児期の専門家が不可欠である。

ELECTは0歳から8歳までの子どもに対する指針であり、子どもの年齢によって、乳児（0－24か月）、トドラー（14－30か月）、プレスクールキンダー（2.5歳から6歳）、学童（5歳から8歳）の4つに分類している。さらに、子どもの発達を、社会性（Social）、情動（Emotional）、言語（Communication・Language・Literacy）、認知（Cognitive）、身体（Physical）の5領域から捉えている。そして、年齢と

表1 認可保育所・幼稚園における子どもと保育者の人数比等一覧⁴⁾

	年齢範囲	子どもと保育者の 人数比	1クラスの 最大人数	有資格保育者の 比率
乳児	18か月未満	3 : 10	10人	1/3
トドラー	18か月以上 30か月未満	1 : 5	15人	1/3
プレスクール	30か月以上 6歳未満	1 : 8	24人	2/3
幼稚園 (JK/SK)	44か月以上 7歳未満	1 : 13	26人	1/2 (教員と RECE)

各領域により、想定されるスキルについての指標や、保育者と子どもとの相互作用及びなぜその相互作用が子どもにとって効果的なのかを示したものが、The Continuum of Development（発達の連続帯）として表にまとめられている。発達の連続性という点において、発達スキルは一時点ではなくある程度幅のある期間内に獲得されることから、年齢範囲は重複するところがある。これは、子供の発達を評価する基礎や達成チェックリストではなく、発達障害を特定するためのスクリーニングツールでもない。これは大多数の子供たちの典型的な発達の軌跡に沿った一連のステップの概要を示したものとされている。さらに、特定のスケジュールに従って達成されるべきスキルの固定的普遍的なパターンを示したのではない。子どもたちの成長と学習について保育者が観察する基礎となるものであり、保育者が保護者と子どもの発達について情報交換するためのものと位置付けられている。表2は、プレスクールキン

表2 プレスクール・キンダー（認知領域）のThe Continuum of Development ⁵⁾

領域とスキル	スキルの指標	相互作用
4.1 自己規制	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の行動や注意を規制するために言語を使う ●自分の行動や注意を規制するために、他者の視点を取る能力を使う ●自分自身の行動をモニターする 	<p>感情を表現するために言語を使う。「マリウムは欲求不満だ。ずっとやってるけど、パズルがまだ完成しないんだ。」就学前児は情動を規制するために、言語を使い始める。子どもが情動に関する語彙を聞いたり、使い始めるときには、言語を使って情動を表現し規制することができる。</p>
4.2 問題解決	<ul style="list-style-type: none"> ●問題を同定する ●前もってプランを立て始める ●情報を集め組織化する ●解決や結果をブレインストーミングする ●因果関係を行為に結びつける ●問題解決のために行動を起こす ●自分の問題を解決するために、結果を見積もる ●知識を移すために、2つの状況の類似性に基づいてルールを作る ●一つの状況から別の状況へ問題の解決方法を生成する 	<p>問題を設定する。例えば、「どうやったら、もっと大きな建物ができるかしら?」「どうやったら浮かんでいるものを沈めることができるかしら?」「手を使わずに、どうやってブロックを部屋の向こう側に動かすことができるかしら?」</p> <p>これは、子どもに問題を解決させ、論理的に考えさせ、考えを表象するために言語を使わせることになる。</p>
4.3 表象	<ul style="list-style-type: none"> ●他の誰かのふりをする ●プロットや想像的な特徴のあるものを使って劇遊びをする ●2Dや3Dモデルを描いたり、構成したりする ●自分の考え、感情、経験を表現するために、アートメディアや道具を使い始める ●自分の考えを構築し、表現するために様々な素材を使う ●別の考えを生成する ●自分自身の作品や他者の作品を再認する ●アート作品を自分の過去の経験、情動、感情、思考に結びつける ●劇遊びの中で役割を果たしたり、他者と協力したり役割を交渉したりする ●言語や付随的な小道具を使って劇遊びを続けたり拡張させる 	<p>子どもの絵が、プログラムや野外遠足の中の最近の出来事を表しているときには、その作品やそれが何を表しているのかについてディスカッションする。「消防車を描いたのね。先週消防署で見たみたいに大きな車輪があるわね。」会話の主導権を子どもに渡すために、間を作る。</p> <p>これは、子どもに、自分の作品について考え、野外遠足で知ったことを思い出させるものである。</p> <p>子どもは現在を超えて進むために表現を使い、また、人々や場所や出来事を探索するためにアイデアや言語や絵を使う。</p>

ダーの「認知」について示されている The Continuum of Developmentの一部である。この「認知」の領域とスキルには表中のスキルを含め、質問、観察、情報を集め組織化、省察し結論に到達、発見したことについて他者とコミュニケーション、論理的な推論（因果関係・連続的変化・変形を探索し仮説構築）、分類、連続的配列、数える、量の決定、量の比較、数の表象、序数と位置の説明と決定、2次元の形と3次元の形の理解、パターンの同定、長さ・重さ・容量・温度・時間・お金の測定、簡単な数操作を完了、数のシンボルを使い操作、空間関係・方向・地図の使用、合計22の9スキルが挙げられている。

この The Continuum of Developmentは、保育者が6つの原則に関して、自分たちの実践及び子どもの発達の理解を定着させるのに役立っている。保育者は、EECTに基づいて日々の保育をし、日々の子どもの活動を保護者に伝える際にも、The Continuum of Developmentの「領域とスキル」の番号を記している。図1は、アプリを使って保護者に送られた日々の活動報告の中に表れていた「領域とスキル(4.12)」の例⁶⁾である。

また、ELECTではこれらの表による説明に加えて、保育環境や保育者が、どのように子どもの発達の原則と理解を実行に移すことができるかを例示している。すなわち、在宅保育、オンタリオ乳幼児センター、就学前コミュニティセンター、保育所、事業所保育所、幼稚園と保育所を統合した場所、フランス語幼稚園、親支援センター、先住民向けヘッドスタートプログラム等での取り組みが紹介されている。ELECTの中に記載されている専門用語の説明を集めた用語集もあり、保育者にとって内容を理解しやすい工夫もなされている。さらに、これらの本編のほかに、付録として、日本を含む14の外国の幼児教育カリキュラムのレビュー、親の関わりについての研究のレビュー、多様性・公平性・インクルージョンについての考察も含まれている。

本編の The Continuum of Developmentによって、保育者自身が子どもを観察するときにその視点は、より多面的に客観的なものになっていくと思われる。また発達の正確な把握と発達の連続性を意識した関わりが行いやすくなるだろう。なぜその相互作用が効果的なのかも例示されているので、特に経験の浅い保育者が実際の子どもの関わりを通して、子どもの学びを理解しやすいかもしれない。さらに、保育者の子どもへのその一言が、子どもにどんな影響を与えるのか、その経験から子どもは何を学ぶのかを、保育者は理解しやすいのではないと思われる。しかし、領域とスキルが非常に細かく分類されているため、子どもの姿を見たときに、第一に子どもそのものを見るよりも、ELECTの基準を思い浮かべ、その活動、その発話が「ELECTの○番の活動/発話」に該当するかといった、The Continuum

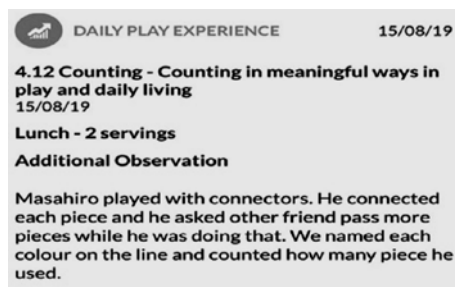


図1 保護者に送られた日々の連絡の中で使われている ELECTのスキル

of Developmentに対応させることのみに専心してしまい、保育者自身の子どもへの共感を通した多様な解釈の可能性を放棄してしまう怖れもあるかもしれない。

その後、州政府は2014年にExcerpts from “ELECT” を公表し、2007年のELECTの基本的な知識を概括した。この中で、「学習は根本的に社会的なものであり、子どもの文化的文脈の中で起こる。初期の数年間、子供たちは積極的な関与、活動、観察、実験、そして他者との社会的相互作用を通して学ぶ。彼らは自分自身や他人についての理解を深めるにつれて、感情を調整し、重要なことに注意を払い、計画を立てることを学ぶ。これらはすべて、社会のおよび物理的環境に埋め込まれた文化的価値観と慣習に基づいている (p.8)。」と記している。また、「幼児期に、子供たちは学ぶ方法を学ぶ。子供たちは、身体活動、他者との社会的相互作用、そして彼ら自身の活発な思考を通して知識を構築する。子供たちは学習のさまざまなツール、すなわち問題を計画し、モニターし、修正し、省察し、調査し、解決する方法を実践する。そして、他の人と意見を交換する。観察と行動を通して、子供たちは自分の仮説を立て、それを試し、何が起こるかを見つけ、自分の答えを定式化する。子供たちは、自分の世界の物を使った直接の行動から、また仲間や大人との視点の交換から、学習方略を開発する (p.9)。」と述べ、子どもの学びと発達について保育者が理解しておくべき重要な点を端的にまとめている。さらに、知識が豊富で子どもや家庭に応答的である保育者が保育環境には不可欠であることから、その保育者は省察的な実践者であるべきとされている。そして「保育者が子どもの発達の何が先に来て、その次に何が来るかを知ることによって、どこで介入すべきか、どんな経験を提供すればよいかを知っている (p.14)。」と、発達の連続性を踏まえた保育者の関わりも述べられている。

また、州政府は、2014年にHow does learning happen? Ontario's Pedagogy for the Early Years (以下HDLH) を制定した。HDLHは、認可チャイルドケアセンター、在宅保育、家族支援プログラムなど、さまざまな保育環境の中でのプログラム開発と教育をサポートするように設計された専門的な学習ガイドである。これは、保育と教育環境の中での教師による子ども・家庭・教師についての根本的な理解、保育所から幼稚園さらに小学校への移行を支える教育的枠組みを設定するものと位置付けられ、公開された。この中では、子ども・親・保育者は「有能で複雑な思考ができるもの」と表現されている。これ以降、すべての認可チャイルドケアは、このプログラムに沿った保育を行うことが必要とされている。しかし、ELECTを廃棄して完全にHDLHに変化したのではなく、保育現場ではELECTも使われている。HDLHには、ELECTで示されていたThe Continuum of Developmentのような指標は示されていない。HDLHは、教師自らが考え探求し省察することを促しているが、ELECTの指標の使用に慣れていたからという理由だけでなく、そのような指標がないと目の前の子どもを理解することに困難さを感じることから理由から、図1に示したような保護者への連絡や、ペダゴジカルドキュメンテーションにも、ELECTの「領域とスキル」番号を表示している保育者が多い。

Ⅲ. オンタリオ州の幼稚園教育

オンタリオ州の幼稚園教育は、以前は半日または隔日保育だったが、2010年から5年計画で、全日制幼稚園 (Full-day Kindergarten) 制度が導入された。導入における政策決定については、松井 (2018) に詳説されているので、本稿では扱わない。学校は、幼稚園を含めて学年に関わらず、9時から15時半までが通常子どもの滞在時間である。これには放課後プログラムの時間は含まれていない。

1. 幼稚園教育要領：The Kindergarten Program 2016

上述した、2007年に制定された、誕生から8歳までの子どもの保育指針であるELECTの6つの原則は、“The Full-Day Early Learning-Kindergarten Program: The Extended-Day Program (2010-2011) Draft version” (Ontario Ministry of Education, 2010) にも組込まれた。2010年から始まった全日制幼稚園教育によって、幼稚園教育カリキュラムの変革が求められるようになったことから、2013年には、ELECTに基づいて、誕生から6歳までの子供が人生の最良の可能性のあるスタートを切れるように、オンタリオ州政府からOntario early years policy frameworkが公表された。さらに、この枠組みに基づいて、上述の通り2014年にHDLHが作られた。その後、このHDLHの中で概観されたアプローチの流れを汲みながら、4・5歳児の発達にとって適切な学習・教授アプローチについての原則や発達期待を示すものとして、州政府は2016年にThe Kindergarten Programを制定した。2016年9月から、州内の幼稚園教育は、ELECTと幼稚園教育要領に基づいて行われている。学習の専門家としての教師と発達の専門家としてのECEが、協働して幼稚園教育を行うように役割が求められている。

The Kindergarten Programは全331ページからなる文書であり、子どもたちがどのように学ぶのかについての様々な研究や実践から、伝統的な教授法から子ども中心の教授法に転換したことに基づいて、4章編成で作成されている。この幼稚園教育要領では、「所属と貢献」、「自己規制とウェルビーイング」、「リテラシーと算数行動を示すこと」、「問題解決と革新」、の4つの枠組みが示されている。そして、この4つの枠組みすべてに関連して子どもたちが学ぶことは、積極的で貢献度が高く責任ある市民かつ、自分自身や他人のウェルビーイングに責任をもつ健康な人、になるために必要な特性と態度を発達させるための基礎を築くこととされている。ここで、「所属と貢献」は、様々なコミュニティへ個人的につながっているという感覚を通して、市民としての帰属意識や態度についての発達に関係する概念である。「自己規制とウェルビーイング」は、自分及び他者の思考や感情を認知し、それに敬意を払い、自分や他者のウェルビーイングを促進することに関係する概念である。「リテラシーと数学的行動を示すこと」は、批判的に考え、多くの異なった視点を理解しそれらに敬意を払い、様々な種類の情報を処理する能力を発達させることに関係する概念である。「問題解決と革新」は、世界を意味付け理論を検証し協働的に問題解決し、それらの中で出てきた考えを創造的革新的に利用することに関係する概念である。

これらの概念のうち、「自己規制とウェルビーイング」が、幼稚園教育要領でも表現されている背景として、オンタリオ州の幼児に関する問題がある。すなわち、オンタリオ州では、G1入学時に1/4の子どもに、学校の成績に影響するような健康や行動面に問題があり、また他の人とうまくやっていく能力が脆弱であることが示されている (Willms, 2002; Kershaw et al., 2006; Janus, 2006)。そして、これらの子どもはどのSES (社会経済的状態) にも存在している。また、小児肥満の比率の上昇が懸念され (Health Council of Canada, 2006)、幼児期の身体的な健康やウェルビーイングの重要性が指摘されている (Mustard, 2006)。したがって、幼稚園教育要領でも「自己規制とウェルビーイング」が枠組みの一つとなっている。

幼稚園教育要領の4章では、学習に対する「全体的な期待」と、どのような行動や姿が4つのどの枠組みに関連するのかが一覧で表示されている。この一覧を使用することにより、「全体的な期待」とそれらが関連する枠組みを、教師がすばやく参照することができるようになっている。以下の表は、全体的な期待項目として表示されているものの一部である。全体的な期待項目が、表中の番号のついている項目である。

表3 幼稚園プログラムの中での全体的な期待と4つの枠組みとの関連一部抜粋⁷⁾

幼稚園プログラムを通して成長するにつれ 彼らは：	所属と貢献	自己規制と ウェルビーイング	読み書き& 数学行動	問題解決と革新
1. 様々な目的のために、様々な文脈で、様々な方法で他者とコミュニケーションする	×	×	×	×
2. 自立心、自己規制、学習や他の活動の中で責任を持つ意欲を示す		×		
3. 遊びや他の文脈の中で、社会的スキルを同定し、それを使う	×	×		
4. 社会的な文脈を含む様々な文脈で、問題解決スキルを使う能力を示す	×	×		×
5. 個人やいろいろな家庭、学校やより広いコミュニティの中での多様性の理解を示す	×			

表3に示した「全体的な期待」31項目のほかに、「各枠組みの期待」項目のそれぞれについて、効果的な教育学的アプローチの例が提供されている。各枠組みによって示されている期待項目の種類と数は異なっている。例えば、「所属と貢献」枠組みでは全体的な期待項目31のうち12項目（表3では、1・3・4・5を含む12項目）について表示されている。例えばそのうちの「1. 様々な目的のために、様々な文脈で、様々な方法で他者とコミュニケーションする」では、まず、このことについての概念的理解が列挙され、その後、「思考と学びを可視化する」と題された表が提示されている。この中では、子どもたちがどのように自分の学びを示してくるかについて、行動と発話例が挙げられ、さらに子どもの学びに対して、応答的・足場架けをするための挑戦的・発展的の3パターンで教師の意図的なかわり方の例が記されている。このように、幼稚園教育要領の「各枠組みの期待」項目においても、ELECT同様に、子どもの様子に応じてその意味づけや教師の関わり例が細かく示されている。ELECTについてⅡ. 2. で述べたように、細かい指標や規準は、経験の浅い保育者にとっては、子どもをとらえるヒントになるかもしれないが、教師が子どもを多様な解釈で理解する機会を失わないかという点が懸念される。

2. 子どもに対するアセスメント・評価・報告

州政府は、2016年にGrowing Success-The Kindergarten Addendum 2016を発表し、この年から教師が保護者へ報告書を作成し、親が子どもの学びの過程を理解するのに役立つようにした。Growing Successの中でアセスメントを、「The Kindergarten Program (2016) の全体的な期待に概説されている知識とスキルに関連して、子供の学習のデモンストレーションを正確に反映する情報を収集および解釈するプロセス」として定義し、「評価の主な目的は、学習を改善し、各枠組み内の全体的な期待に関連して子どもの成長と学習について、子どもが自己規制し自律的な学習者になるのに役立つ」と記述し

ている。このアセスメントの後には、領域ごとの「特定の期待」に基づいて子どもは評価される。その結果は、年度ごとに教師から親に対して3回、10月下旬から11月（新学期）に新学期が始まったときの様子について、冬と春は子どもの遊びや探求の中で起こる4領域の学びについて伝えられる。報告書の中の「Key Learning」項目には、それまでの時点での子どもにとって最も重要な学習であり、The Kindergarten Program (2016) の中に表されている「期待」に基づいて、子どもが示した重要なスキル、興味や知識が記述される。統一されたフォーマットはGrowing Successの中に示されている。

この報告書は親に渡されるだけでなく、オンタリオ州の子どもの永続的な記録として保存され、G1からG12で義務化されている報告書に組み込まれる。報告書は、親が園での子どもの様子を知るうえで役立つ、と解釈することができる。しかし、現場の教師たちが、子どもの学習プロセスを意味付け、教師自身の教育学的実践を省察するためのペダゴジカルドキュメンテーションに焦点を当てることと、事前に設定された目標に到達したかどうかという学習の結果についての評価に焦点を当てることを日々の実践の中で合わせることに、とても苦労していることが指摘されている（MacAlpin, 2017）。この理由について、MacAlpin (2017) は、Growing Success中の定義をどう解釈するかによるものとだと述べている。すなわち、Growing Successには「The Kindergarten Program (2016) の全体的な期待に概説されている知識とスキル」から子どもを見るのか、「解釈する」ところから子どもを見るのか、という視点が混在しているためであるとしている。さらに、これらの視点は、そもそも「子どもを学習プロセスに積極的に関与している共同参加者とみなすのか、それとも事前に決定された学習目標に向けられた受動的な参加者としてみなすのか」に関わる問題であり、The Kindergarten Program (2016) で掲げられた「子ども中心」の意味も曖昧なものとなってくると述べている（MacAlpin, 2017）。また、現場では、未だ教師が主導する従来の教授法から子ども中心のそれへと変えることができない教師たちがおり、「できたか、できないか」で子どもの日々の活動を見てしまう、という事例も見受けられる。

さらに、G1になる前の子どもの状態について、SKの半ば過ぎに、教師が各子どもについて、Early Development Instrument (EDI) を完成させることになっている。EDIは、心身の健康、社会的コンピテンス、情緒的成熟、言語及び認知発達、コミュニケーションスキルと一般的な知識の5領域103項目からなる、年齢に応じ期待される発達に関する質問紙である。カナダで1998年から使われ、オンタリオ州では2004年以来、3年周期でデータが収集されている。最新の調査では、5領域の1領域以上で何らかの脆弱性を示す子どもが全体の3割弱おり（Ontario Ministry of Education, 2019）、学校で「学ぶ準備」が十分でなく、就学後の成績が低くなる可能性が示されている（Calman & Crawford, 2013）。州政府は、このデータによって支援のニーズの高い地域を特定し、効果的な幼児教育への投資を計画している。EDIは、Growing Successによる報告書とは異なるが、その年齢に期待される発達かどうかを確認するという意味では、子どもを「事前に決定された学習目標に向けられた受動的な参加者としてみなす」視点に近いと思われる。したがって、州政府は、レッジョエミリアの教育に刺激を受けて「子ども中心」の幼稚園教育を掲げたものの、実際には小学校で学ぶ準備ができているかどうかを評価することに重心を置いていることが示唆される。日本では、改訂された幼稚園教育要領の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」が示されたが、これが幼児教育の到達目標とされないように、オンタリオ州の例から学ばなければならない。

3. 幼稚園の活動例

① 公立フレンチイマージョン幼稚園（2019年度）

オンタリオ州ロンドン市のあるA幼稚園は、SKクラスは2クラスで、各クラスは教師1名とRECE1名の二人体制である。教師は英語を第一言語・フランス語を第二言語とし、子どもたちにフランス語で話しかけ、時々英語を使っている。RECEは英語を第一言語とし、子どもたちにはすべて英語で話しかけている。保育時間の多くは、教室の中で子供たちがお絵かきや粘土やビンゴゲーム等、各自がやりたいことを行う。幼稚園は小学校・中学校（G1からG8）に併設されており、校庭は4・5歳児だけでなく中学2年生まで使う。外遊びをしたい子どもが自由に校庭の好きな場所で遊ぶのではなく、休み時間のみ校庭に出ることが認められ、学年ごとに校庭の中での遊び場所が決められ、校庭には複数の監視員がおり、子どもたちの遊びを見守っている。この間、教師は職員室に戻って休憩し、RECEは教室に一人で残っているため、教師たちが子どもと一緒に遊ぶことはない。おやつやランチタイムでは教師はその場におらず、RECEが黙ったまま見守りながら、子どもたちは各自持ってきた食べ物を、ばらばらに食べ始め終える。体育の時間は、一列に並んだ子どもたちをRECEが校舎内の廊下から歩かせて体育館に連れて行き、体育の専任教師が体育を行う。体育の時間が終わると、教師が体育館から、一列に並んだ子どもたちを教室に連れて戻る。教師やRECEは、子どもが教室から外に出る際は、学校内の廊下や校庭であっても、行方不明等がないように安全面に非常に注意している。日本の幼稚園等で取り組まれている食育は、園では全く行われていない。上述したように、小児肥満率上昇などが懸念されている現状では、宗教による食生活の多様性などもありつつも、園での食育への関心が増すことが期待される。

② 公立（英語）幼稚園のアウトドアクラス

ロンドン市郊外のあるB幼稚園では、SKとJKで毎週1回アウトドア授業が展開されている。これは、幼稚園専門教員という肩書をもつ教員が、校庭の脇の1区画を利用して、教員があらかじめ設定した人工物や自然物と子どもが関わりながら、遊びながら様々なことを学ぶ授業を行っている。教師は、子どもたちが興味を持ちそうな環境設定だけ行い、子どもたちの様々な探索や発見を見守っている。①で述べたように、子どもたちが好きな時に好きな場所で外遊びができない状況の中では、外で様々なものを観察したり関わって探索したりする機会がないので、子どもたちはとても楽しい時間のようなものである。しかし、この経験には意味がないと、アウトドア授業を取り入れない幼稚園も州内には多い。このアウトドア授業には、通常クラスの教員やRECEは参加せず、教室からこの区画までの学校内の経路では、全て人数確認をしながら一列に並んで、アウトドアクラスの教員が引率している。このため、担任教師はアウトドア授業で子どもがどのような探索をし、遊びの中から何を学んだのかを直接見ることはない。

4. 保護者や教師に対する支援

オンタリオ州教育省は州のHP（<http://www.edu.gov.on.ca/kindergarten/>）において、全日制幼稚園での子どもの学びを理解するための情報を提供している。例えば、“A parent's guide to play based learning in full-day kindergarten”（全日制幼稚園での遊びを中心とした学びへの親向けガイド）と“A parent's guide to literacy and mathematics in full-day kindergarten”（全日制幼稚園での読み書きと算数についての親向けガイド）には、子どもは遊びから学ぶこと、家庭やコミュニティのなかで、子どもが探索する時間や機会を与えるようにする、また子供に質問するときはYes-Noの質問ではなく、オープンエンド質問をするようにするなど、親が、家庭やコミュニティの中で子供の学びをどのようにサ

ポートしていくべきかについて述べられている。

また、カナダは移民が多いため、州の公用語である英語が家庭内言語でない子どもも多い。このため、教育省は“Supporting English Language Learners in Kindergarten: A Practical Guide for Ontario Educators (Ontario Ministry of Education (2007))”（幼稚園での英語学習者を支援する：オンタリオの教師向け実践ガイド）を公表し、そのような子どもの英語の学びを支援するために、教師が教室内でどのように支援したらよいかを示している。

IV. プロフェッショナル・ディベロプメント

2018年3月オンタリオ州教育省は、Western大学とオンタリオ・レッジ協会が協定を結び、Provincial Centre of Excellence for Early Years and Child Care（以下CEEYCCと略）を創設し、2020年3月まで州政府の財政支援により、幼児教育プログラムの向上と専門的学習を支援するためのプロジェクトをWestern大学が主導した。CEEYCCは、カナダ西部のブリティッシュコロンビア州で10年以上に渡り実践されてきたことをオンタリオ州で展開するための拠点である。

ここで、ブリティッシュコロンビア州での取り組みを概観すると、ブリティッシュコロンビア州では、教師・保護者・行政をサポートする役割をもつ、イタリア・レッジオエミリアのペダゴジスタのシステムに倣い、州内でペダゴジストを育成し、2007年からはInvestigating Quality project（質評価プロジェクト）によりその質評価を行ってきた。そして、ブリティッシュコロンビア州内のECEをサポートするペダゴジストの州ネットワークとして、Early Childhood Pedagogy Network (ECPN)を作り活動中である。ECPNはブリティッシュコロンビア州の子ども家庭発達省（Ministry of Children and Family Development: MCFD）の財政支援によるプロジェクトである。

オンタリオ州では2018年及び2019年に、CEEYCCが地域の中で働くコミュニティ・ペダゴジストを養成し、地域の教師や保護者を支援する活動を始めた。この養成講座には、Moss（2019）を読み討論することが含まれていた。Moss（2019）は、文化・言語・信念構造・生活環境に関係なく、全ての子どもについての科学的な真実を見出し、それがすべての子どもに当てはまるという発達理論に対して疑問を提示している。すなわち、言語的・文化的に多様な生活状況を無視していないか、幼児期またいかなる時期の教育においても唯一正しいという視点はないということを述べている。この文書を通して、受講者は伝統的な子どもの見方とは異なる視点を得ることが求められた。2020年3月州政府と大学の協定終了によりCEEYCCは解散したが、養成されたペダゴジストたちは、大学機関に属するペダゴジストたちと共に、The Pedagogist Network of Ontario（以下PNOと略）を作り、州内の保育・幼児教育に携わる教員に専門的な学びを支援するための資料の提供を行うとともに、ブリティッシュコロンビア州のECPNと姉妹ネットワークとして、州内の保護者や行政機関も支援する活動を行っている。

この活動は開始されたばかりであり、州内の保護者や教員・保育者の中でのペダゴジストの認知度は非常に低い。そもそも、多くの保育・幼児教育現場では「ペダゴジスト」という概念すら認知されてない。また、2019年には保守系州政府が教育の効率重視を追求することから教育予算削減を打ち出し、教育関係者から大きな反発が生じた。効率よく、学校で学ぶ準備を整わせるために年齢に応じた学びを支援するという州政府の視点と相いれないPNOの活動は、財政的支援を得られにくく、今後どこまで継続できるかは未知数である。

V. おわりに

カナダ・オンタリオ州の保育・幼児教育の改革と現在の取り組みをまとめてきた。州政府は2010年から全日制幼稚園を開始させ、さまざまな改革を行ってきた。その中で、全日制幼稚園に子どもを通わせることによって、「子供の読み書きと数学のスキルを向上させ、将来の学習のための強力な基盤を提供するのに役立つ」、「G1への移行が容易になる」ことを保護者に伝えている。子どもに対する早期の投資がハイリターンをもたらし、貧困層の子どもたちの経済状態や生活の質を高めるという教育経済学の知見（Heckman, 2013）を、効率よく社会にとって経済的な価値のある人間を作り出すために重要な幼児教育、と曲解した政策となっているのではないかという強い疑義が、ECPNやPNOを主導する人々にある（Pacini-Ketchabaw & Moss, 2020）。政策決定者には、「多様性や複雑性のある現代社会の中で生きる子どもたち」という視点が少ないように思われる。さらに、ELECTとHDLH及び幼稚園教育要領への取り組みから、保育者が子どもを理解するための詳細な基準と、保育者自身の探求や省察を促すことを両立させることは難しいことが示唆される。今後、PNOの活動が州内の教師・保護者・自治体にどのような影響を及ぼしているのか、また、オンタリオ州の子どもの中心の保育・幼児教育がどのように一人一人の教師の日々の実践の中にあらわれていくのかについて注視していきたい。

付記

本稿は、2019年度十文字学園女子大学特別研修制度の助成を得て、2019年4月から1年間、カナダ・オンタリオ州ロンドン市Western大学、及びキングストン市Queen's大学での研修で行った調査をまとめたものである。

注

- 1) オンタリオ州の2年保育の幼稚園をJK（年中クラス）・SK（年長クラス）、小学校1年をG1、高校3年生をG12と呼ぶ。
- 2) 公立フレンチマージョン幼稚園への入園は、管轄する教育委員会によって異なり、ロンドン市は2019年度まではSKからだったが、2020年度からはJKからに変更しているが（大宮, 2020）、ロンドン市の公立カトリック・フレンチマージョン幼稚園は2020年度もSKからの入園を認めている。
- 3) 2019年4月15日の為替相場では1カナダドルが約85円である。これを基に計算した。
- 4) 表1はChild Care Center Licensing Manual（Ontario Ministry of Education, 2019）より筆者が作成したものである。
- 5) ELECT（Ontario Ministry of Education, 2007）p.52の一部を筆者が翻訳した。
- 6) 図1は、実際に保護者送られたものを基に、筆者が架空事例を作成したものである。
- 7) The Kindergarten Program（2016）p.122より筆者が一部抜粋翻訳したものである。表中の「×」は各期待が枠組みと関連することを示している。

引用文献

- Health Council of Canada (2006). *Their Future is Now: Healthy Choices for Canada's Youth and Children*. Ottawa, ON: Health Council of Canada.
- Heckman, J. (2013) *Giving Kids a Fair Chance*. Cambridge: The MIP Press.

- Janus, M. (2006). Measuring community early child development. *The CAP Journal*, 14 (3), 14-16.
- Kershaw, P., Irwin, L., Trafford, K. & Hertzman, C. (2006). *The British Columbia Atlas of Child Development*. 1st Ed. Vancouver, BC: Human Early Learning Partnership, University of British Columbia.
- MacAlpine, K.A. (2017) Through the looking glass: Interpreting Growing Success, The Kindergarten Addendum, Ontario's assessment, evaluation, and reporting policy document. *Journal of Childhood Studies*, 42 (2), 34-40.
- 松井剛太 (2018) カナダのオンタリオ州とブリティッシュコロンビア州における全日制幼稚園の政策過程. 保育学研究, 56, 154-165.
- 森本洋介 (2019) カナダ・オンタリオ州における教員資格管理団体 (OCT) と教員養成課程改革との関係についての考察. 弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻 (教職大学院) 年報, 1, 23-34.
- Moss, P. (2019). *Alternative narratives in early childhood: An introduction for students and practitioners*. NY:Routledge.
- Mustard, J. F. (2006). *Early Child Development and Experience-based Brain Development: The Scientific Underpinnings of the Importance of Early Child Development in a Globalized World*. Washington, DC: Brookings Institute.
- 大宮明子 (2020) カナダにおけるバイリンガル教育の現状に関する一考察. 十文字学園女子大学紀要, 51, 119-131.
- Ontario Ministry of Education (2007) *Early Learning for Every Child Today*.
- Ontario Ministry of Education (2007) *Supporting English Language Learners in Kindergarten: A Practical Guide for Ontario Educators*.
- Ontario Ministry of Education (2010) *Full-Day Early Learning-Kindergarten Program: The Extended-Day Program (2010-2011), Draft version*.
(<http://www.edu.gov.on.ca/eng/curriculum/elementary/kinderprogram2010.pdf>)
- Ontario Ministry of Education (2014) *How does learning happen? Ontario's Pedagogy for the Early Years*.
- Ontario Ministry of Education (2016) *The Kindergarten Program*.
- Ontario Ministry of Education (2016) *Growing Success-The Kindergarten Addendum2016*.
- Ontario Ministry of Education (2019) *Early Years and Child Care Annual Report 2019*.
- Pacini-Ketchabaw, V. & Moss, P. (2020) Early childhood pedagogy: Veronica Pacini-Ketchabaw interviews Peter Moss. *Journal of Childhood Studies*, 45 (2), 98-111.
- Willms, D. (2002). *Vulnerable children*. Edmonton, AB: University of Alberta Press.